TAP2000

Toride Art Project 2000

取手リ･サイクリング アートプロジェクト2000 ［家･郊外住宅］プロポーザル展

Toride Re-cycling Art Project 2000 ［Toride Suburban Housing Proposal Exhibition］

2000年10月4日(水)～15日(日)

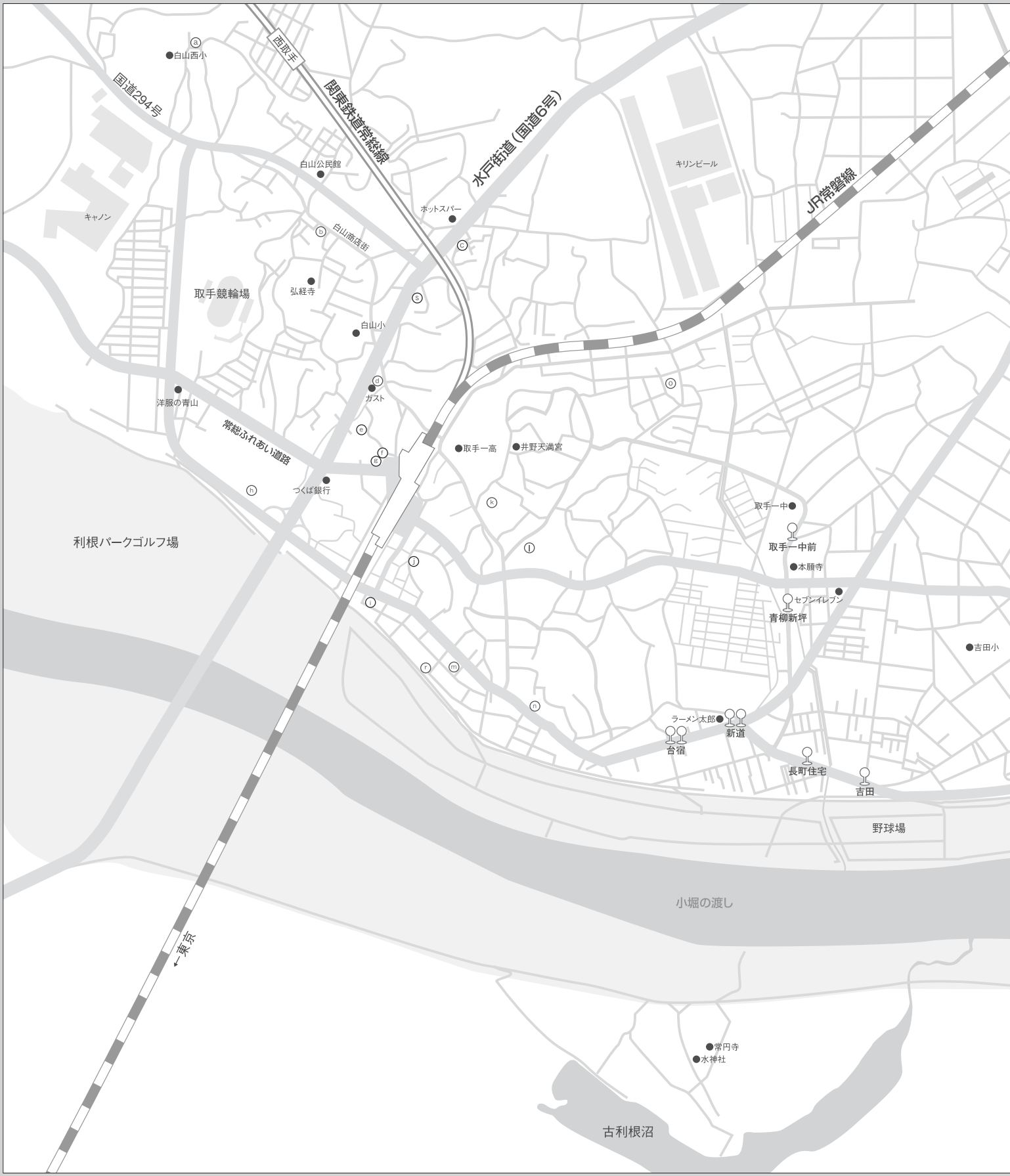
Wed. October 4 - Sun. October 15, 2000

東京芸術大学大学美術館取手館

http://www.toride-ap.gr.jp

TORIDE

RE CYCLING ART PROJECT



取手市および取手市民によって提供された、作品設置のための候補物件は19件にのぼりました。そのうち、プロポーザル実現のために7件を使用することになりました。

TAP2000

Toride Art Project 2000

取手リ･サイクリング アートプロジェクト2000 「家･郊外住宅」プロポーザル展

Toride Re-cycling Art Project 2000 [Toride Suburban Housing Proposal Exhibition]

2000年10月4日(水)～15日(日)

Wed. October 4 - Sun. October 15, 2000

東京芸術大学大学美術館取手館

http://www.toride-ap.gr.jp

TORIDE

RE CYCLING ART PROJECT

ごあいさつ

昨年に続き、今年も東京芸術大学先端芸術表現科、取手市民、取手市が一体となって取手アートプロジェクト2000を開催することとなりました。今年は「家・郊外住宅」をテーマに作品を公募し、全国から寄せられた応募点数は海外も含めて131点にのぼりました。プロポーザル展は、これらの募集作品をすべて展示して東京芸術大学取手校の美術館で開催され、会期中、公開選考会によって6点の入選作が決定しました。多数、多様なプロポーザルのなかからわずか6点に絞り込むには、選考委員の皆様のご苦労も多かったことと思います。

プロポーザルの募集から作品の受付展示まで、プロポーザル展開催のためにご尽力いただきました皆様に敬意を表するとともに感謝申し上げます。また今年から、取手市文化事業団も実行委員会の一員としてお手伝いさせていただくことになり、大変嬉しく思っています。

今回選出されました作家や招待作家の作品は取手市内各所の家屋を使用して実現されます。来る11月25日からの公開には多くの方々にご覧いただき、取手市の新たな一面を感じていただけることを期待しております。

取手市文化事業団理事長
取手市長　大橋幸雄

「郊外都市・取手」を表出する試み

取手アートプロジェクト2000（TAP2000）が始まりました。取手市と東京芸大先端芸術表現科が、地元住民とともに取手の町中で展開するこのアートプロジェクトも今年で2回目となります。今回は、「郊外・家」というテーマを設け、より明確にこのプロジェクトの方向を示しました。

取手市は、東京の近郊に位置する典型的な郊外と位置づけられます。昔ながらの乾物屋と24時間営業のコンビニが同居し、団地が林立するとともに、見捨てられた木造家屋があります。水田が続くのどかな風景のなかに、異質な要素が混在するこの町は、日本が高度成長と引き換えに受け入れなければならなかった痛ましい傷痕のようにも見えます。圧倒的な都市化の流れは、固有の文化を破壊し、ハイブリッドな「郊外都市」を生み出したのでした。このような取手の町を、今回の取手アートプロジェクトのテーマにそって、それぞれの作家がどのように作品化するのか、興味がつきません。

取手アートプロジェクトの公募部門では、海外をふくめて多くの方達から131点の作品プランが送られてきました。それらは、郊外と家、私たちを取り巻く環境と精神の現在を照らし出す力にあふれていました。取手の芸大美術館でそのすべてを展示するとともに、外部の選考委員を迎えて公開選考会を行い、慎重な討議の結果、6人の作家を選出いたしました。3人の招待作家を含め、この秋、取手市内の各所に展開される作品群は、郊外都市の抜き差しならない問題を突きつけてくることでしょう。

秋晴れの日に、取手駅前に設置された色とりどりの自転車で、町に仕掛けられた数々のアート作品を訪ねる機会が、ひとつの「事件」として人々に記憶されることが私たちのもくろみです。多くの方々がこのプロジェクトを訪れ、作品の誕生に立ち会い、自分の住んでいる町について考えるきっかけになることを期待します。

取手アートプロジェクト実行委員長
川俣　正

小松敏宏 | Toshihiro Komatsu

O-HOUSE

取手市取手1-2-3 写真屋さん45裏木造平屋住宅

◆1966年静岡県生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修了後 ライクスアカデミー　アムステルダムを経て、マサチューセッツ工科大学大学院建築学部視覚芸術科を修了。現在ニューヨーク在住。アメリカやオランダ、そして日本国内で、建築を利用したサイトスペシフィックなインスタレーションやパビリオンの作品を中心に、制作活動を行っている。

取手リ・サイクリングアート プロジェクト2000 招待作家

津村耕佑 | Kosuke Tsumura

FINAL HOME

プロジェクト各会場（8箇所）

◆1959年埼玉県生まれ。ファッションデザイナー。82年第52回装苑賞、94 年第12回毎日ファッション大賞新人賞受賞。株式会社三宅デザイン事務所を経て94年KZELLE (96年KOSUKE TSUMURAに変更)、FINAL HOME両ブランドを立ち上げる。2000年ヴェネツィア・ビエンナーレ第7回建築展参加。

取手市内の作品設置家屋各ポイントと中間地点にオレンジ色のFINAL HOMEを着た人を立たせます。ポケットには防寒用に新聞紙を入れます。ほかに地図や救急道具を入れます。取手リ・サイクリングアートプロジェクトに訪れた道の解らない人や、自転車のケアをします。使用後のFINAL HOMEはクリーニング後、ボランティア団体を通じて寄付します。FINALHOMEはそれ自体が家の代用なので、家屋は使用しません。

ホンマタカシ | Takashi Homma

Toride city 2000

取手市長兵衛新田193-2 かたらいの郷

◆1962年東京都生まれ。99年第24回木村伊兵衛賞受賞。写真集に『東京郊外TOKYO SUBURBIA』光琳社刊、『コミックHマンガカメラ』ロッキング・オン刊などがある。個展「東京郊外TOKYO SUBURBIA」パルコギャラリー、グループ展「Elysian Fields」パリ、ポンピドーセンターなど多数。

白い影絵によってできている仮設住宅の区切られた窓からは、日没後にスライドされる取手の郊外風景が見える。家の窓からは同じ風景しか通常見られないが、この窓から見える風景は「とれいんぐ」で行く電車の風景のようにコマ送りされる。それら約100点の風景は取手の日常の風景であり、あまりに日常であるために直視されない風景である。その連続した日常風景をホンマの「まなざし」が再構築し再提出する（“日比野克彦”協力の秘密のオマケあり）。

展望鏡4体、家屋を外部から内部に水平に貫く。

展望鏡1：30cm x 30cm x 90cm。

開口部は、前後とも60度の角度に切断する。

展望鏡2：30cm x 30cm x 210cm。

開口部は、前面のみ45度の角度に切断する。

展望鏡3：30cm x 30cm x 690cm。

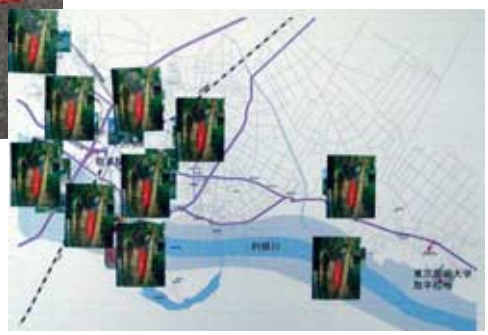
開口部は、前面のみ45度の角度に切断する。

展望鏡4：30cm x 30cm x 137.3cm。

開口部は、前後とも60度の角度に切断する。

展望鏡（periscope）は、鏡板が内側に多面体をつくり構成される。

それは、現実を破砕、反転、逆転し写し出す。



取手リ・サイクリングアートプロジェクト2000 公開選考会

平成12年10月7日（土）1:30～5:30 PM

全国から187件のエントリーがあり、総数131点のプロポーザルが提出され、東京芸術大学大学美術館取手館に展示された。6件のアートプロジェクトを公募により選出するための選考会が、展示されたプロポーザルを前にして、観客に公開する形で行われた。先端芸術表現科教官3名の他に、広い分野から6名のゲスト選考委員が加わり、一般投票結果もその過程において反映された。（参加作家は、招待作家3名を加え、合計9組となった）

選考委員

磯崎　新　建築家/東京芸術大学大学美術館客員教授
伊藤俊治　美術史家/多摩美術大学教授
今福龍太　文化人類学者/札幌大学教授
鬼澤恭子　取手市教育委員会教育長
鈴木　実　彫刻家/郷土作家の会会長
根本　凡　前取手アートプロジェクト実行委員長
川俣　正　先端芸術表現科教授
木幡和枝　先端芸術表現科教授
藤幡正樹　先端芸術表現科教授

選考結果

入選

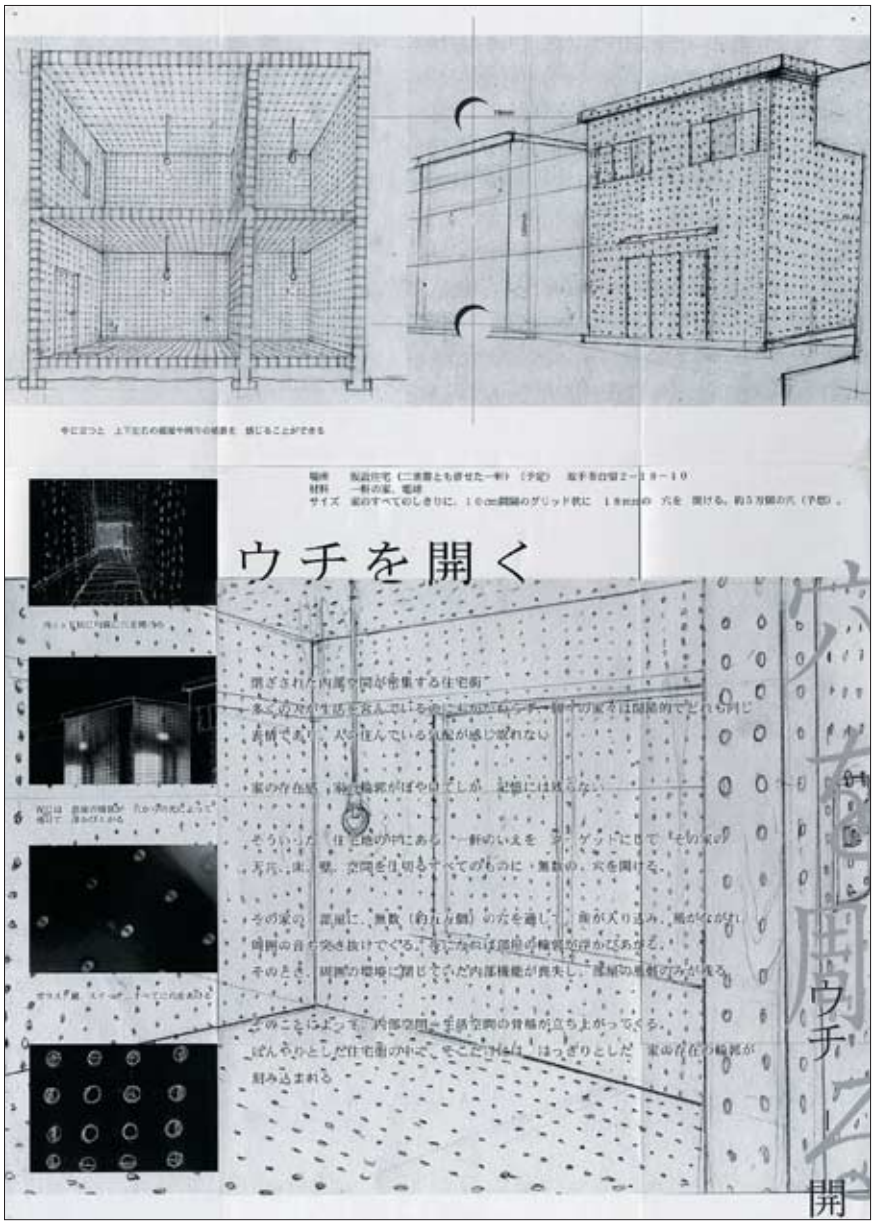
北川貴好.....『ウチを開く』
島田忠幸.....『時の堆積』
杉浦久子・杉浦友哉....『sympathetic rabbit』
田中大造・山嵜一也....『TIME TUNNEL』
西島治樹.....『REmain InLight』
Jannie Regnerus.....『The whispering house』

ウチを開く

取手市台宿2-18-10 東口仮設住宅

郊外住宅。そこにおいて、家の印象はぼんやりとしている。一軒の家をターゲットにして、その天井、床、壁、空間を仕切るすべてのものに無数の穴を開ける。無数（約5万個）の穴から、埃や風が入り込み、周囲の音も筒抜けとなる。夜になれば部屋の輪郭が浮かびあがる。そのとき、周囲の環境に閉じていた内部機能は喪失し、部屋の形骸のみが残る。そのことによって、内部空間＝生活空間の骨格が立ち上がってくる。ぼんやりとした住宅街の中で、そこだけにははっきりと家の存在の輪郭が刻み込まれる。

◆1974年大阪府生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。2000年Mt Fuji Project（富士山麓サティアン跡地/山梨県上九一色村）、2000-2001年スキマ プロジェクト（command-Nおよび谷中、上野、秋葉原界隈の建物と建物の隙間空間）を進行中。

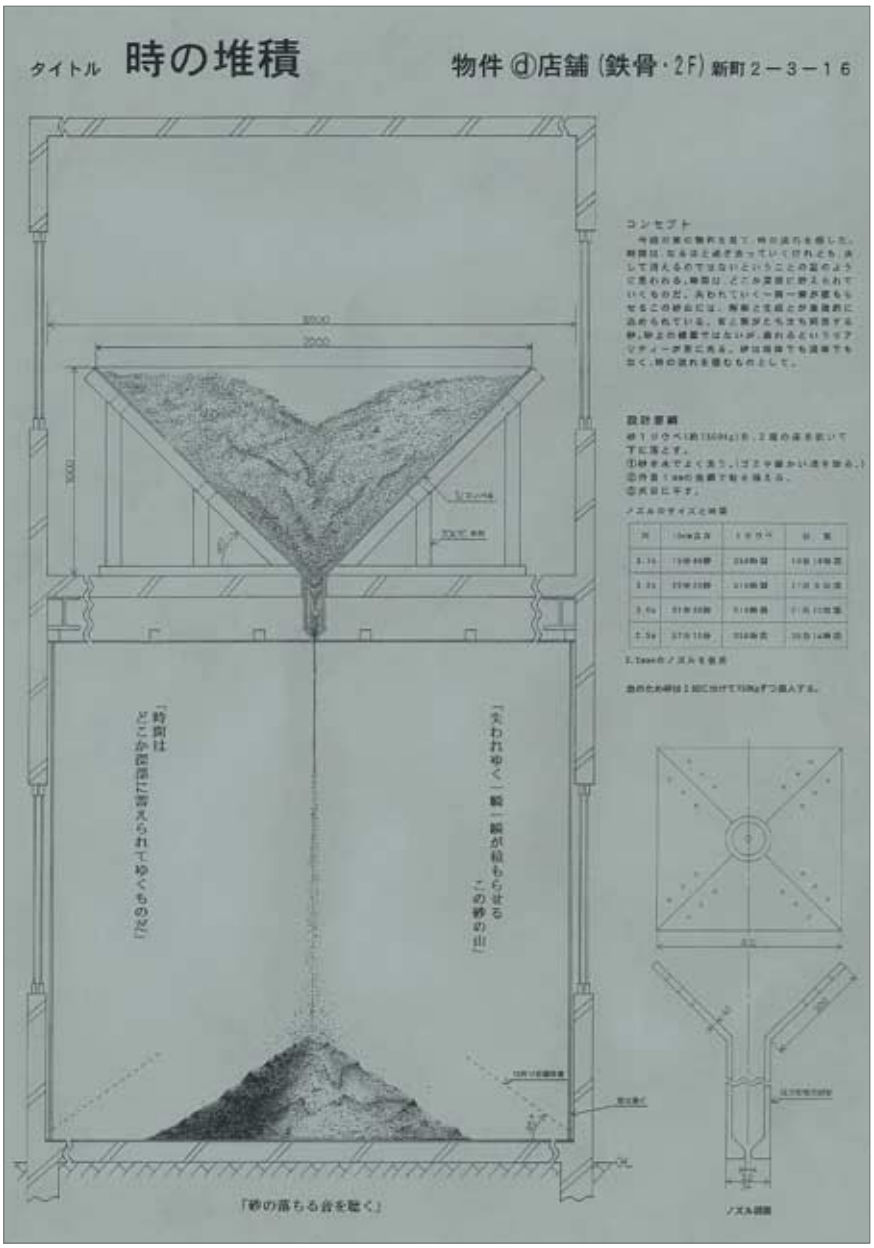


時の堆積

取手市新町2-3-16 国道6号沿い旧ブティック

この家を見て、時の流れを感じた。時間は、なるほど過ぎ去っていくけれども、けっして消えるのではないということの証のように思われる。時間は、どこか深部に貯えられていくものだ。失われていく一瞬一瞬が積もらせるこの砂山には、解体と生成とが象徴的にこめられている。有と無がたちまち同居する砂。砂上の楼閣ではないが、崩れるというリアリティーがつねに光る。砂は個体でも流体でもなく、時の流れを積むものとして。

◆1946年東京都生まれ。取手市在住の彫刻家。モリスギャラリー他での個展、オーストリア国際彫刻シンポジウム、グルジア国際彫刻シンポジウム、あびこ野外美術展など国内外で多数の展覧会に参加。パブリックコレクション：いわき市立美術館、原美術館、ルスタビ市、ゴスフォード市など。

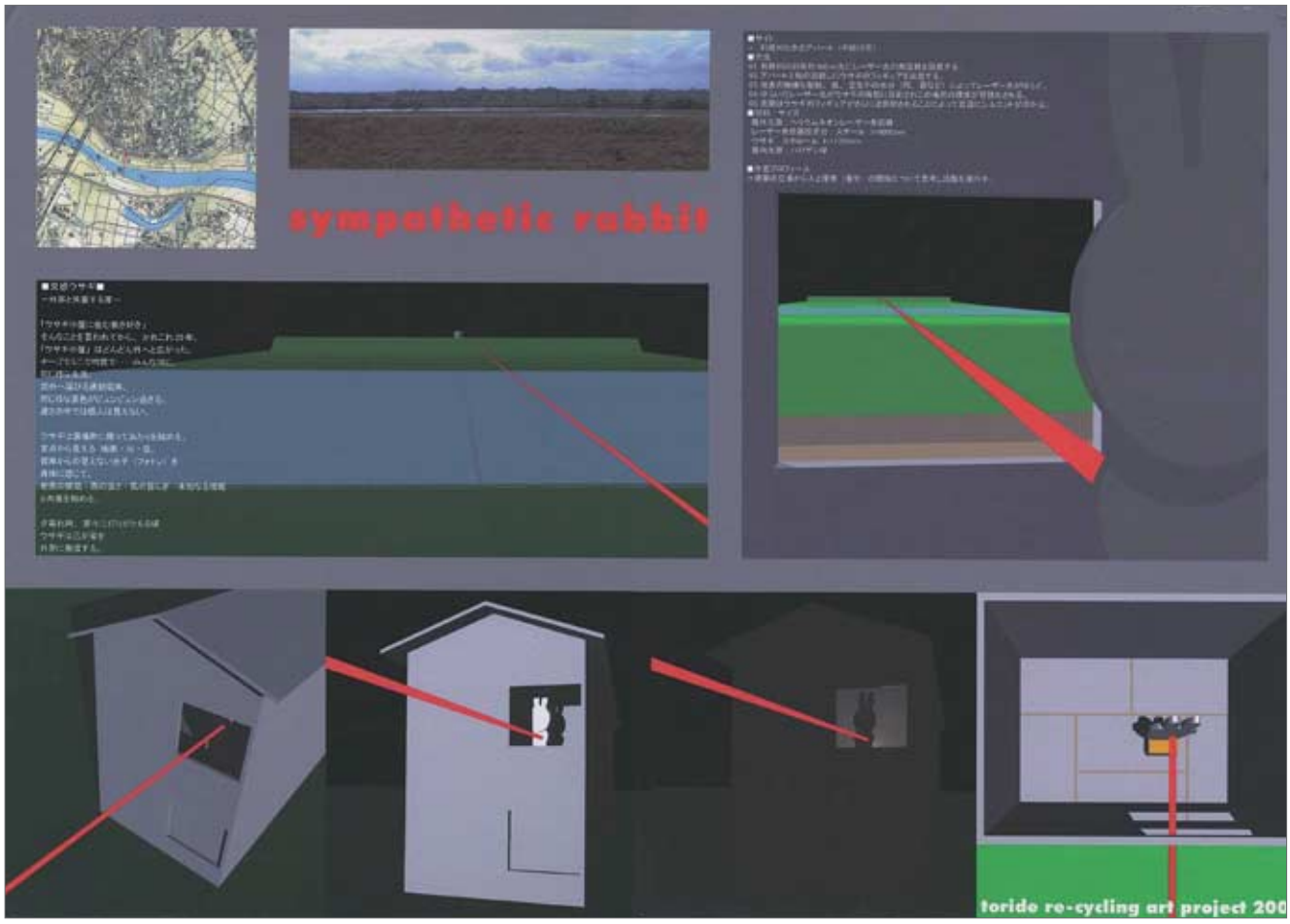


sympathetic rabbit

取手市東1-6-9 宇田川荘

取手は利根川北岸の台地に拓けている。この河は広大な河川敷を持つうえに、対岸では市街地化がさほど進行していない。したがって、ここから南を臨む風景はとても東京近郊とは思えない広がりを持っている。彼岸から到来するレーザー光はこのランドスケープを意識化させる。この場の空間と時間はレーザー光によって顕在化する。ウサギは光を受けると同時に窓辺に立つことによって、外界の環境と相互的に関わる主体となる。

◆杉浦久子：1958年東京生まれ。早稲田大学大学院（建築）修了後、フランス国立建築学校パリ・ラ・ヴィレット校卒業。フランス政府公認建築家。現在、昭和女子大学生活環境学科常勤講師。
◆杉浦友哉：1963年東京生まれ。早稲田大学大学院（建築）修了後、フランス国立建築学校ヴェルサイユ校卒業。フランス政府公認建築家。現在、（株）槇総合計画事務所勤務。



TIME TUNNEL

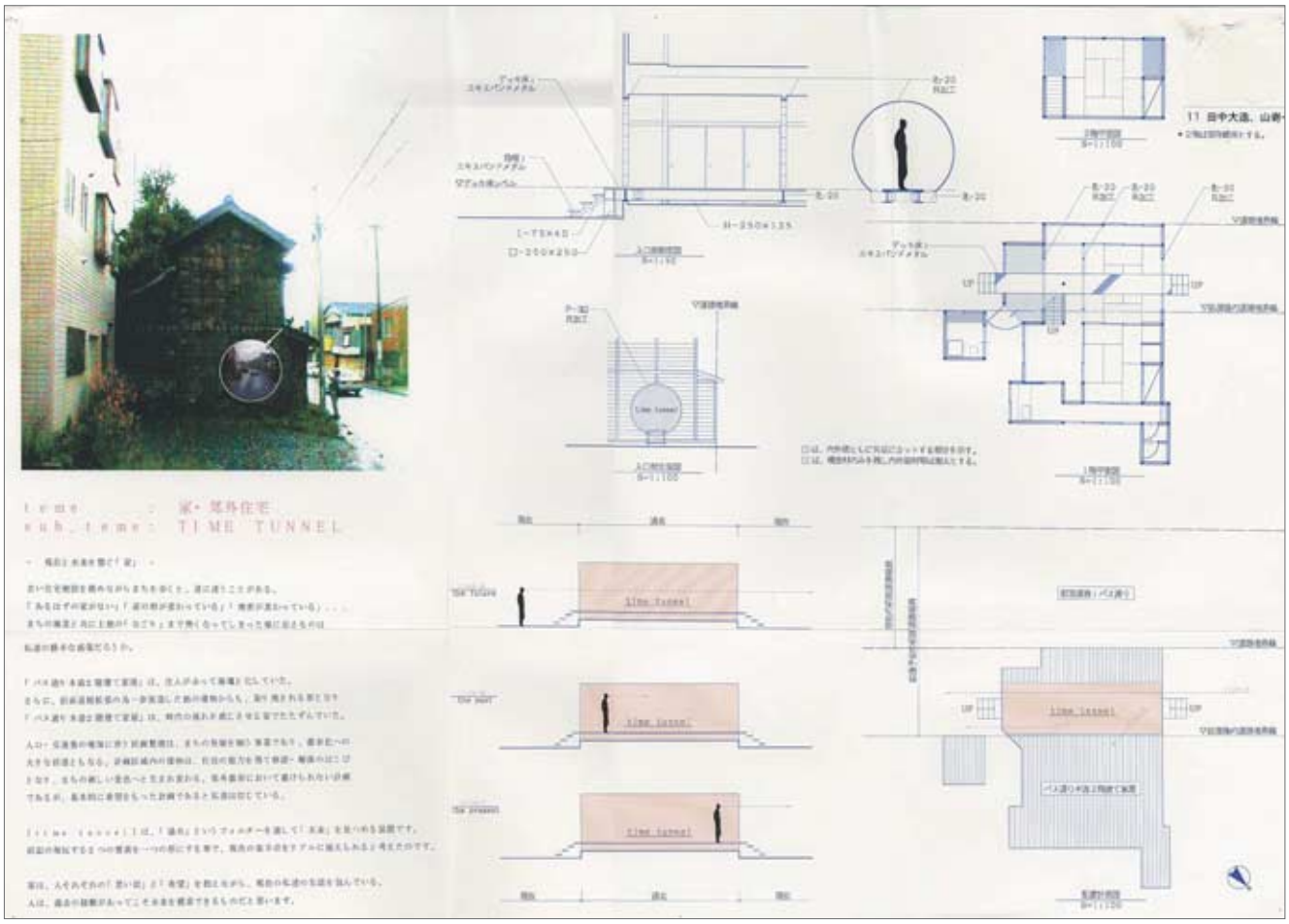
取手市東2-6-54 念仏院下木造二階建住宅

古い住宅地図を眺めながら町を歩くと、道に迷うことがある。「あるはずの家がない」「道の形が変わっている」「地形が変わっている」…。町の風景とともに土地の「なごり」までがなくなってしまったと思うのは私たちの勝手な感傷だろうか。

今回の提案の舞台となる「バス通り木造2階建て家屋」は住人が去って廃墟と化していた。さらに、前面の道路拡張のため、一歩後退した周囲の建物からも取り残される形となり、そこは、時間の止められた空間が残されている。この建物を、過去のものとして取り残した区画整理という事業は、その計画区画内の建物を移設、解体し、町の景色を変えてしまう。しかし同時に人口・交通量の増加にともなう町の発展のためのものであり、都市化への大きな前進と希望を持ったものでもある。

今回私たちが提案する【TIME TUNNEL】は「過去」というフィルターを通して、「未来」を見つめる装置である。また、前述の『家の思い出』と『都市計画』という相反する2つの要素を1つの形にすることで、現在の取手をリアルに捉えられると考えた。家は、それぞれの「思い出」と「希望」を抱えながら、現在の生活も包んでいる。その空間の中を生活者の時間軸が貫いていると言い換えてもいい。この家に未来へと導く時間軸を体感するため、トンネルを穿つ。

◆田中大造：1974年福島県生まれ。芝浦工業大学衣袋研究室卒業、（株）都市設計勤務。
◆山嵜一也：1974年東京都生まれ。芝浦工業大学大学院建設工学専攻修士課程修了。（株）レーモンド設計事務所勤務。
◆2000年より2人での協同設計開始。



REmain InLight

取手市新町4-9 刀水荘

便利なコミュニケーションツールとして通信機器は広く普及し、その恩恵は計り知れない空間と時間の観念を短縮した。その受け手と送り手の間に入り込み勝手に情報の断片を搾取すること、この作品においてアミを振る行為はまさにそれを実行することに繋がる。最終的にアウトプットされるデータからは美しい光の塊となって現れる。しかしその元データは人々のプライバシーの断片から形成されている。法的には許可された行為ではあるが、このアミは、われわれのモラルの壁を破るための幇助装置として認識することもできるわけである。アミを振りながら歩くこと、この何処かのどかとも思える光景は、単に空間の有りようを意識するに留まることなく、情報に監視され今現在のコミュニケーションの実状を知ることになるのです。

◆1971年静岡県浜松市生まれ。東京藝術大学大学院修了。現在、岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー在学中。個展：都市のオアシスver. 2. 5（Ginza G-Art Gallery、東京）。企画展：都市のオアシスver. 3、electropti"あらかじめ失われた未来のために"など。

ヤンニ・レグニルス｜Jannie Regnerus

The whispering house

取手市台宿2-2-17 芭蕉ハウス

壁に取り付けられたグラスに耳をあてるという行為は、さまざまな記憶や感情を喚起します。閉じられた空間の中で外の世界を感じるのは、興味と不安の入り交じった複雑な体験です。私的な記憶、オランダ語での会話、雨の落ちる音など、過去から現在にいたる様々な音が混じり合い、不思議な雰囲気が長年空き家になっていた「芭蕉ハウス」で再生されます。そしてそれは、この和洋折衷の家屋が持っている記憶でもあるのです。

◆1971年オランダ生まれ。オランダマストリヒト芸術アカデミー卒業後、スペイン、イタリアに留学。現在CCA北九州に滞在中。この間各種奨学金を受ける。99年アムステルダム市立近代美術館での個展など展覧会多数。

取手リ・サイクリングアート プロジェクト2000 公開選考会

選考過程

冒頭に、川俣正取手アートプロジェクト実行委員長より、本年のテーマである「家・郊外住宅」についての説明と、昨年をふまえて、今回をより特色のあるものにしたい、自転車に乗って鑑賞できる現実的なプロジェクトを求めているという旨の挨拶が行われた。各委員紹介の後、選考手順について検討され、9名各自が会場を回り審査を行った。選考に先立ち、意見の交換があった。

●

（以下敬省略）「何をしたいのか、内容がはっきり解らないものが多い。プロポーザルに対する認識の問題。」（川俣・磯崎）、「コンセプトであるはずのものがそうでないために、非常に言葉が曖昧になっている。」（藤幡）、「まず簡潔なもの、そして物理的に何をやるかのセンスや美しさを見ていった。また、タイトルが過小評価されている。」（今福）、「まちなかの作品を見てまわる時に、自分のなかで、ランドスケープが描けそうなものを挙げた。」（伊藤）、「家そのものが何かと問う作品を選んだような気がする。」（鈴木）、「物件の周囲や地形、そういうものの関連でプロポーザルを見ていった。」（根本）、「市民が喜べるもの、楽しめるものに重点を置いてみた。」（鬼澤）、「今回は特に、家の『中』と『外』といった関係を重視した。」（木幡）

第1審として、選考査員は、推薦するプロポーザル6点を記入して提出した。それに、一般投票による上位5名を加えた総数40点を再度、全員で見て回り、それぞれ推薦理由を述べあった。

●

第2審では、選考委員による3点の記名投票の結果、選考枠6点のうちのまず4点の入選が確定した。

●

Jannie Regnerus『The whispering house』

獲得票の最も多かったプロポーザル。「完成したときに、洗練された作品になるのでは。」（磯崎）、「こういう行為自体がちょっとした仕草なんだけど、その仕草がいろんな事を喚起していく。そのところは面白い。また、コミュニケーションを含めて、取手のそういった家に何か聴こうとしている。それは外国人だからかもしれないが、そんなイメージをもつ。」（川俣）、「視覚を遮られたところで、体全体を耳に変換していくという仕組みを、上手に実現しようとしている。」（今福）、「場の記憶の引き出し方は、他と比べて直接的でなく、うまいと思う。」（藤幡）

田中大造・山嵜一也『TIME TUNNEL』

「バス通りからこのアートプロジェクトを行っていることがアピールできるし、アイデアも面白い。」（鬼澤）、「家に入っていながら、入っていない、路地裏をつくっている感じがして面白い。」（川俣）、「非常に明快。」（鈴木）、「拡幅工事が予定されている地形をうまく使っている。」といった意見があがった。

島田忠幸『時の堆積』

「まわりの情報をモデル化し、結晶化させる仕組みを持っている。アトラクティブで面白い。」（伊藤）、「壊せないという家への想いがあるのでしょうか。そんな想いが、この作品に込められている気がした。それに、プロポーザルがとても分かりやすかった。」（鬼澤）

西島治樹『REmain InLight』

「仮想の昆虫採集をまちの中で行い、それが家へと展開していく。郊外のまちの仮想性、例えば、取手の町にいるんだけれど、東京で仕事をしていて、意識は東京にある。頭のなかと自分のフィジカルな場所の乖離のようなものが、新しいテクノロジーによって見えてくる。」（藤幡）、「郊外性に対する記憶喚起の行為として、そしてなによりも目に見えないものが可視化される面白さがある。」（今福）

●

残り2点の選出にあたり、それぞれが推薦するプロポーザルを巡って、熱い議論がかわされた。

●

最終的に第3審として、残り2点を選ぶための投票が行われ、その結果、入選作品全6点が決定した。

●

杉浦久子・杉浦友哉『sympathetic rabbit』

「対岸からレーザーでシューティングするという発想は、斬新。全体のなかで、ユーモアのある作品もあっていい。」（藤幡）、「利根川と、それを挟んだ両岸の地を使っている面白さがある。」（鈴木）

ここで、鬼沢選考委員より、夜間の限定された時間にのみ行われるという展示条件について、市民を代弁する立場から疑問の声があがり、他の選考委員との間で白熱した論議が交わされた。

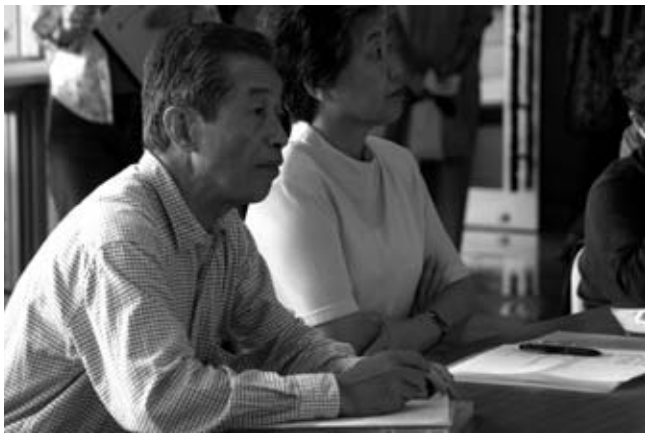
それを受けて、「それぞれが守らなければいけないことは微妙にずれている、だからこそ一緒に行う意味がある。議論になった方がいい。」（木幡）、という声もあがった。

北川貴好『ウチを開く』

「単純な発想だけど、同じ様な家が並ぶ中での対比は面白い。作業はかなり大変だと思われるが、実現性は高い。その穴を通して、家の中からもれる光も見てみたい。」（川俣）

●

また、惜しくも補欠となったのは、Metaphor 8『Site 2-2-17』、梅根常三郎『カムフラージュ』、モリタカシ『life in the balloon』の3点であった。



謝辞

取手リ・サイクリングアートプロジェクト2000
プロポーザル展の開催にあたり、
以下の方々にご協賛、ご協力を賜りました。
ここに記して、厚くお礼申し上げます。

■助成
日本自転車振興会
野村国際文化財団

■協賛
SHISEIDO
キリンビール株式会社
株式会社安井建築設計事務所
株式会社キャッツアグリシステムズ
取手市建設業協会
Mecenat 社団法人企業メセナ協議会認定事業

■主催
取手アートプロジェクト実行委員会
東京芸術大学美術学部先端芸術表現科・取手市・
取手市教育委員会・財団法人取手市文化事業団・
取手市商工会・アート取手

取手リ・サイクリングアートプロジェクト2000　プロポーザル展カタログ
2000年11月発行

企画＿＿＿＿＿＿ 取手アートプロジェクト実行委員会
〈制作〉
構成＿＿＿＿＿＿ 渡辺好明・辛美沙・高橋裕行
編集＿＿＿＿＿＿ 古池周文・大石真依子・黒田美幸
デザイン＿＿＿＿ 岡田由美子
マップ制作＿＿＿ 木村稔
写真＿＿＿＿＿＿ 塩原勝利・松浦昇
ホームページ制作＿ 村田良二

発行＿＿＿＿＿＿ 取手アートプロジェクト実行委員会
印刷＿＿＿＿＿＿ 阿部写真印刷（株）

ⓓ新町2-3-16 6号沿い旧ブティック

ⓗ新町4-9 刀水荘

長兵衛新田193-2 かたらいの郷

ⓘ取手1-2-3 木造平屋建住宅

ⓚ台宿2-2-17 和洋折衷住宅

ⓛ台宿2-18-10 東口区画整備事業仮住宅

FINAL HOME: プロジェクト各ポイント

ⓝ東2-6-54 木造2階建住宅

ⓡ東1-6-9 木造2階建アパート

KEIRIN 競輪補助事業

このカタログは、日本自転車振興会（競輪公益資金）の補助を受けて製作しました。